
全ては循環する

神崎ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ては循環する

【Nコード】

N7801M

【作者名】

神崎ミキ

【あらすじ】

その日は雨が降っていた。

ただそれだけだったのに気が付けは沢山の物を失っていた。

そして僕は絶望に打ちひしがれながら、雨に濡れるのだった。

どうして雨は降るのだろう。

窓から景色を眺めながら、滴を垂らす僕は思う。

別に本気で悩んでいるわけではない。

馬鹿じゃないんだ、雨が降る理由も原理も分かっているつもりだ。

自然は――物事は全て循環している。

全てはそうであり、そうあるべきなのである。

一方的な関係などあってはいけないのだ。

……まあ、何が言いたいのかと言うと

「人の傘を勝手に持っていくのってどうなの？」
って事だ。

これは今朝の事だった。

いつもの様に家を出ようとすると、ぽつりと雨が降ってきたの。なので僕は、自転車登校を諦め、傘を手を持ち、バスを使う事にした。そこまでは至って普通の登校模様。

問題は、バスを降りた後にコンビニに立ち読みに寄った時に起こった。

いざコンビニを出ようとしたら、傘立てに傘が無かったのである。せめてボロボロになった傘でも代わりにあれば、まだマシだったのだが、傘立ては見事に空だった。

おまけに、鞆に入れておいたはずの折りたたみ傘も何故か見つからず、傘を買おうにも財布がまたしても何故か空だったため、僕はななくなく無防備な状態でコンビニを後にすることになった。

お陰で学校に辿り着いた時には、髪も制服も鞆も全てびしょ濡れだ。

「まあまあ」

目の前ではニヤニヤしながら彩が僕の折りたたみ傘を振り回している。

「まあまあって、誰のせいで滝修行を終えたみたいになってると…

…」

「誰が悪いかというと、一番は傘を取っていった奴、二番は不注意だった君、そして三番が昨日キミのカバンからなんとなく傘を抜いておい私だね」

「……え！？ 僕の方が悪いの！」

確かに傘が無くなった事に関して自分に全く非が無いとは言わない。だけど目の前の彼女の方が明らかに――

「折りたたみ傘は朝にちゃんと確認しておけば大丈夫だったし、わざわざ何も買わないのにコンビニに寄らなければ何の問題もなかったわけだ」

「うっ……」

彼女にも問題はあるはずなのに、何故か自分が悪い気がしてくる。実に不思議だ。

今までを振り返ってみても、一度足りとも彼女を論破した記憶がない。

彼女は口が異常ににうまい、詐欺師顔負けだ。

「まあ、これは返すよ」

そう言って彼女は僕に折りたたみ傘を渡す。

「あとこれも」

そう言って彼女は僕に小銭を――

「って、これも！」

「ああ、昨日どうしてもシャーペンが買いたくて借りんだよ」

「いやいやいや！ 借りたんだよじゃないって！ いつの間に、そしてシャーペンぐらい、いつでも買えるじゃん！」

「突然買いたくなるときってあるだろ？」

「いや同意を求められても困るんだけど……」

「結局シャーペン買ってないんだけどね」

「じゃあ、何故借りた！？」

「なんとなく」

……まあ、分かってたけどね。彼女は人のお金を勝手に使うような

奴じゃないし。おそらく、今日に雨が降るのを事前に知っていて折りたたみ傘とお金を鞆から抜いたのだろう。コンビニはバス停の近くのので、傘を盗られる確率が高い。つまり彼女は、こうなる事を予測していたわけだ。

彼女は時たま、こういう悪戯めいたものを仕掛けては、『なんとなく』で済ませる。

何時もの事だ。怒りはしない。

それに、彼女の言う通り注意を払っていれば、何も起こらなかっただろう。

僕の負けだ。しょうがない。

傘が無くなるのが、雨に濡れようが、

財布の中身が全で一円玉になろうが――

「一円玉！」

「やっと気づいた。なんの突っ込みもなく財布に仕舞うからどうしようかと若干不安だったじゃないか」

今度こそ全く非がないの僕に責める様な視線が突き刺さる。

なんかやけに多いなと思ってはいたけど、まさか全部一円玉に成っていたとは。

確か、千円札も有ったはずだぞ。

「いやいや、これどうするのさ！」

「使えばいいんじゃないか？」

「無理だよ！」

まず、財布に入りきらない。

そして、世の中はレジに一円玉のみで挑む人に優しいように出来ない。

「はあ……」

彩は溜息を漏らし、やれやれのポーズをとる。

「もっと頭を使いなよ」

「……使うってどうやって？」

「指で弾いて敵をやっつけるとか」

「投げ銭!？」

敵って誰だ？

そもそも一円玉じゃ当たっても大して痛くないんじゃないか？

「積み上げてタワーを創るとか」

「……虚しくない、それ？」

一人寂しく、せっせと一円玉を積んでいる自分をイメージして、テンションが下がる。

まあ、素直に銀行で両替して貰うか。迷惑だろうと思うけど、銀行なら千枚の一円玉をお札に替えてくれると信じている。

「ところで、そろそろ授業が始まるわけだが……キミはその格好のままにいるつもりなのかい？」

「あ……」

彩との雑談ですっかり忘れていけど、僕は全身びしょ濡れ状態だった。

しかし、どうしよう。今から着替えている暇もないし、そもそも着替える物がない。

「まあ気休め程度にこれを使いたまえ」そう言って彩は、どこからか取り出したタオルを僕に差し出す。

「……ありがとう、彩」

彩が悪戯をし、僕が傘を無くし、雨に濡れ、その事で彩と話をし、楽しい一時を過す。そしてまた彩は、悪戯を繰り返す。

ほら、やっぱり循環してる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7801m/>

全ては循環する

2011年10月6日10時45分発行